

大岡昇平の戦争小説

森本信子*

はじめに

大岡昇平は文学という観点に限って言えば実に幸運な経歴の持ち主である。大岡自身、「優れた人物との交友に恵まれていた」¹と認めているように、成城高等学校2年生のとき、同級生の兄、詩人富永太郎の親友であった、東大仏文卒業間際の小林秀雄にフランス語の家庭教師をしてもらうが、1時間はフランス語その後2時間は文学の話であったという。4ヶ月続いたフランス語の授業の後東京を離れた小林に替わって大岡にフランス語と文学を教えたのは河上徹太郎であった。小林を縁に知り合った詩人、中原中也とはあまりに親密であったためにむしろ逃げ出したくなかったのが、大岡が東京を離れて京都大学に入学する動機のひとつであったそうである。これら昭和初期の気鋭の文学者たちが年下の大岡を大切に育てたのは、高等学校ではゲーテを読みたい一心でドイツ語を勉強し、その後ランボーに魅了されてフランス語を始めたという大岡に、ただの金持ちの文学青年にはない知性と好奇心を見出したからであり、このまなざしは河上徹太郎の「生意気盛りだけってわけではないよ」²という言葉に表れている。

大岡が数年のサラリーマン生活の後、暗号手として戦争に駆り出され俘虜生活を送った後復員したとき、『俘虜記』の執筆を勧めたのも小林秀雄であった³。『俘虜記』にはすべてを言葉で表しつくそうとする執着とも言える大岡の態度が貫かれているが、この言語至上主義は、小林らとの議論が如何に容赦ないものであったかを髣髴とさせる。戦前からこれほど文学の洗礼を受けながらも、戦後の『俘虜記』によって遅れて作家の仲間入りをすることになった大岡の転機は、戦争体験を言語化することであった。高度の文学談義に培われた自分の能力によって語らねばならないものを、戦争体験によってついに得たのである。この論考では、『俘虜記』、『野火』、『レイテ戦記』の3作品を取り上げるが、どの作品においても大岡の言葉は鋭利な刃の切れ味を持つ。「常に目覚めていなくてはならぬ」⁴というスタンダール流の大岡の筆致は、日本的経験でしかありえない第2次世界大戦の俘虜生活の再現において少しも曇ることとはなく、事実の検証だけでなく、人物やその評価に鮮明な輪郭を与えているのが特徴となっている。

この論考では扱わないが、大岡の恋愛心理小説の代表作『武蔵野夫人』に登場する勉は、女主人公、従姉道子との恋愛において重要な人物だが、その人物造型に不可欠の要素は勉が「復員者」であるということである。また、道子や周囲の経済状況が戦争によって大きく変化することもこの小説の根幹を形作る重要な要素である。大岡の作家活動の出発点にあるのが戦争体験であり、それまでの豊かな文学的体験を包括して創作活動へと昇華させる原点になっていること確認させてくれる作品である。

『出征』という『俘虜記』の前を補足する作品の中で、「私」が妻にもらった「千人針」を海に投げ捨てる場面がある⁵。国家の暴力による兵士としての自分の死と、家族を持つ平凡な市民としての死との間のあまりの不連続性を前にして、無理にこの2つの死に関連を押し付けようとする「千人針」という物体の介入を拒む行為であり、たった一人で死に直面する決意、また、他の何物も個人の死に色づけすることは出来ないという冷めた意識の現れである。国家が家族の情を利用して戦争という集団の暴力をどんなに正当化しようとしても、戦場の死という現実の過酷さを隠蔽することは出来ない。こうして始まった大岡の戦争体験の中の何が文学の中に抽出されているのか、またそれを書く大岡独特の書く態度とはどのようなものなのかを具体的に見ていくことにする。

* 薬学部 第4英語教室

1 『俘虜記』『野火』『レイテ戦記』の執筆状況

昭和20年(1945年)終わりの冬、大岡は復員した。現在の『俘虜記』の最初の章「捉まるまで」は復員後ほどなくして筆を執り始め⁶ 初出末尾には「1947、5、25」に執筆されたとある⁷ から、ほぼ1年かけて完成された作品である。第2章「サンホセ野戦病院」、第3章「タクロバンの雨」と第4章「パロの陽」⁸ が、1948年の3月3日と5月31日と短い期間に立て続けに執筆されたのに比べて、「捉まるまで」発表に時間がかかっていることが注意を引くが、これは、大岡が作家としてのデビュー作の推敲に余念がなかったと同時に、最も書きにくい、しかし最も書かねばならぬ心理的内容を持つという理由もあると考えられる。

第5章「生きている俘虜」の執筆日付は「1949、1、20」、第6章「戦友」は「1949、1、26」、第7章「季節」は「49、5、10」となっている一方、小説『野火』の前半が『文体』第3号、第4号に掲載されたのが、1948年12月と1949年7月であるから、『俘虜記』と『野火』は平行して書かれていた。『野火』の執筆はいったん中断され、恋愛小説『武蔵野夫人』が1950年に発表されてから、1951年になって『野火』後半が発表されており、この2作品の内容には交錯する部分があると大岡は述べている⁹。1949年から51年にかけて、『俘虜記』の第8章以降が書き継がれていることから、この時期は『武蔵野夫人』を加えて『俘虜記』『野火』が平行して書かれていたと言えよう。したがって、『俘虜記』と『野火』は一方は記録、他方は小説といった形を取りながら、大岡個人の戦争体験を言語化するという大きなひとつの活動として読むことができる。

『レイテ戦記』は『俘虜記』『野火』の執筆からほぼ20年後、『中央公論』で1967年1月号から1969年7月号まで、31回にわたって連載された。この作品は、『俘虜記』の完成後、自身の戦争体験を書くことに一応の区切りをつけ、その後は、『酸素』などの小説、歴史小説のあり方を問題とした井上靖との『青き狼』論争、自身の歴史小説『天誅組』発表などを経てから、もう一度戦争の実像に迫ろうと、膨大な日本、アメリカ双方の資料に当たって書かれた。歴史小説における史料の扱いに対する大岡の考え方は、『レイテ戦記』における戦争資料の検討の態度を決定するのに役立ち「行動に至らない不確定な人間心理については心理小説家に任せる。」¹⁰ という基本姿勢、つまり、事実を小説化しないという立場となった。また、『レイテ戦記』執筆の最中に、1967年3月18日から23日までレイテ島を訪れ、3月28日から30日までは、大岡の戦中の駐屯地ミンドロ島にも立ち寄った。こうして、史料と現地調査による詳細な記録を目指した『レイテ戦記』は、『俘虜記』『野火』よりも鳥瞰的な立場に立って、三人称を主語とした客観的記述に徹した文章によって、「私」の視点から書かれた『俘虜記』『野火』では書ききれなかった戦争にまつわる問題を資料を基に詳細に分析するが、やはりその中に筆者の批評的見解が挿入される構造を持つ。

2 個人としての生と死

『俘虜記』執筆と同時期に別の雑誌にこの前後のいきさつを書いた一連の作品があるが、そのうちのひとつ『出征』の中に、突然の戦地出征の命令を受けて出発する船から、妻のくれた「千人針」を投げ捨てる場面が書かれていることは先に書いた。「千人針」という国家が平凡な国民の感情に巧妙に訴える手段を拒否することから始まった大岡の戦争は、平凡な市民から一兵士へ、という社会的立場の変化をたった一人で受容することであった。「私はすでに日本の勝利を信じていなかった。私は祖国をこんな絶望的な戦に引きずり込んだ軍部を憎んでいたが、私がこれまで彼らを阻止すべく何事も賭さなかった以上、今更彼らによって与えられた運命に抗議する権利はないと思われた。一介の無力な市民と、一国の暴力を行使する組織とを対等におくこうした考え方に私は滑稽を感じたが、今無意味な死に駆り出されていく自己の愚劣を晒わないためにも、そう考える必要があったのである。」¹¹ 兵士になるとは確実に死、たとえ「無意味な死」であってもそれを常に意識しながら生きることである。兵士にとって生きることとは、次第に社会的目的を失い、やがて、国家のためでないばかりか、家族のためでさえなく、僚友の死を前にした「肉体の反作

用¹² というきわめて生理的な欲求となる。戦場で兵士を突き動かす強い生の衝動は、社会的存在意義を剥奪された純粋な個人の生物学的な欲求として発生するのである。

個人の生物としての生命が最も明確に露呈されるのは、兵士が病気になったときである。熱帯が戦場の兵士は、マラリアの感染が多く、大岡も例外ではなかった。『野火』では、「私」は結核の再発に見舞われる。病気となった、しかし生命力の残っている兵士は、戦闘能力がない上、治療の対象になるほど重症でないと判断され、足手まといでしかない。結局、軍隊にも病院にも見捨てられ、行き場のない孤独な状況に置き去りにされることになる。『俘虜記』において、部隊から脱落してたった一人となった大岡が、いよいよ自分はここで死ぬと覚悟した時に、水を飲みたいという欲求を執拗に追及する姿は、人間の生きようとする衝動が何よりも生物としての強烈な欲求であることを示している。

『野火』の主人公田村は自然の中の規則正しさに対して鋭い感受性を持つが、これは生の欲求と深い関係がある。川の流れの渦を見ながら、「私はその規則ありげな、繰り返す運動を眺め続けた。一人になってから、こういう繰り返しが、いつも私の関心の中心であったのを思い出した。それは自然の中にあるように、人生の中にもあるべきであった。」¹³ と考える。その後、自分がフィリピン人の女を撃った銃を水に捨てる時「私はそのまま銃を水に投げた。ごぼと音がして、銃は忽ち見えなくなった。孤独な兵士の唯一の武器を捨てるという行為を馬鹿にしたように、あっけなく沈んだ。あとに水は依然として燦銀に光り、同じ小さな渦を繰り返していた。」¹⁴ と、田村の注意を引くものは、行為の選択の是非とは無関係に繰り返す自然の反復性と規則性である。この小説では、自然を含めた外界の規則性の描写が最初から強調されている。「舷側を過ぎていく規則正しい波の音と、単調なディーゼルエンジンの音に伴奏されて、この規則正しい風景は、そのとき私に甚だ奇怪に思われた。」¹⁵ 敵機の爆音でさえ、恐怖の対象として感じていない場合には、「蜜蜂のような単調な唸り」と捉えられ、単調であるとは規則的に繰り返されるということである。生命の営みには繰り返しが内包されていて、生の欲求とは無限の繰り返しの願望であるというのが、田村の発見した生命観である。

生を問題にすれば当然、死とは何か、が問題となる。『野火』の中では、この問題を生物としての視点から考えようとする姿勢がある。兵士になり、さらに病兵になることによって、死に直面する必要性が増すが、まわりに現実の死をたくさん見るにつれて、死は恐怖の対象から、自然の一部としての事実へと変貌する。「死はすでに観念でなく、映像となって近づいていた。私はこの川岸に、手榴弾により腹を破って死んだ自分を想像した。私はやがて腐り、様々の元素に分解するであろう、三分の二は水から成るというわれわれの肉体は、大抵は流れ出し、この水と一緒に流れていくであろう。(中略)死ねば私の意識はたしかに無となるに違いないが、肉体はこの宇宙という大物質に溶け込んで、存在するのをやめないであろう。私はいつまでも生きるであろう。」¹⁶ 人間を元素の集合として捉えるならば、死後その元素が他の物質の中に流れ込むと考えることは、自然の法則にかなっている。意識を失った物質の流転を「いつまでも生きるであろう」と捉える視点は、主人公田村の狂気の始まりを示す兆候だが、実は、自然を生命のつながりと考えれば科学的に正しい考えである。「私は喉からこみ上げてくる痰を、道端の草に吐きかけ吐きかけ歩いて行った。私はその痰に含まれた日本の結核菌が、熱帯の火にあぶられて死に絶えていく様を、小気味よく思い浮かべた。」¹⁷ という風に、痰を結核菌に還元し、温度との関係を考え、菌自体の生死について考察するのは、すべての生命を自然の中で人間と同列に考えるという、新たな視点による死の認識に基づいている。

3 倫理的選択の検討

『俘虜記』において、大岡が最後の水探求の途中で思いがけず出会ったアメリカ兵に対して、自分は「撃たない」という決心をしたが、それが善意によるものだったといえるのかどうか、俘虜となってからもその意味を求めて考え

続けることになる。「人類愛から発して射たないと決意したことを私は信じない。しかし私がこの若い兵士を見て、私の個人的理由によって彼を愛したために、撃ちたくないと感じたことはこれを信じる。」¹⁶ という分析における「個人的理由」とは、その兵士の若さとそれに見合った声の高さへの感動である。その後銃の安全装置をはずしながら結局撃たなかったのは、別の方面で銃声がし米兵がそちらに去ったからである。撃たないという決意と、撃たなかったという結果の間には、倫理的選択と実行というだけでは説明のつかない何か重大なものがあると考え、大岡は徹底的に思索する。生物として生き延びることが最大の関心事である状況においてさえ、人間がすべきこと、してはいけないことの区別をできるとすれば、それを可能にしたものは、すでに完全に断絶してしまった社会との絆の中での倫理観ではない。まず大岡は、「殺さない」のは「殺されたくない」という願望の倒錯したものだとする。しかし、俘虜となっても、撃たない決意と実現についての瞑想は続き、これら一連の出来事には「神の摂理」¹⁹ が働いているのではないかという結論に達する。孤独な病兵という完全に社会性を失った純粋な個に突然生まれた倫理的選択とその実現は、キリスト者ではないと断言する大岡にとって、それでもやはり「神の摂理」を感じさせるほど強烈な超越者によって規定されなければ説明のつかないものなのである。

『野火』は、大岡が山中で敵を撃たなかったのはなぜかという倫理的意味について、類似の状況を小説化することによって新たな意味を模索する試みとして読むことも出来る。敵を撃つか撃たないか、という問題は、人肉を食べるか食べないかという究極の倫理的問題²⁰ となって現れる。飢えを癒すため、つまり、生物的な自己保存の欲求を感じても食べないためには、「神であろうか、何か私とは別なもの」²¹ の登場が必要だった。「食べてもいいよ」といって死んでいった将校の肉をまさに食べようとした瞬間に、「左手が右手を握ってその行為を禁止してくれた。」²² という場合の左手が、田村の中で最も美しい部位であることは象徴的である。左手を動かしてくれたのは、「神」²³ だったのである。こうして田村は、「私はこれまで反省なく、草や木や動物を食べていたが、それらは実は、死んだ人間よりも、食べてはいけないだったのである。生きているからである。」²⁴ という結論に達し、飢えに耐えて最後まで人肉を食べることを拒否するのである。極限状態に追い込まれた人間が、倫理的な行動を取ることができるためには、人間を超越する「神」が必要になるという考えが、ここでも示されている。

4 批評精神

大岡には、一般に受け入れられている定説や通説を鵜呑みにはしないという批評的態度が見受けられる。

『野火』の主人公田村は、「私は、ふと前にも、私がこんな風に歩いてきたことがあったと感じた。いつどこであったかは不明であるが、過去の不定な一瞬において、私はやはりこうして歩いてきた。」²⁵ という経験に直面して、フランスの哲学者ベルクソンの「偽の追想」の通説を受け入れることを拒否する。作者大岡は、いわゆる既知感について、ベルクソンの「明快な哲学に反感を持っていた」²⁶ と田村に言わせている。「絶えず増大して進む生命という仮定は、いかにも近代人の自尊心に媚びる観念であるが、私はすべて自分に媚びるものを警戒することにしていく。」²⁷ という田村の言葉は、大岡自身の徹底的で、自虐的な側面も持つ批評精神をそのまま反映している。記憶の先行、というベルクソンの考えを否定することから出発して初めて、未来における繰り返し願望の過去への投影という、独自の既知感解釈に到達できたのである。既存の通説に懐疑的態度で臨み、問い直すことを繰り返すことは、大岡の口癖でもある「正確に」²⁸ 物事を捉えようとする根本的姿勢と同一の性質のものである。

俘虜收容所で接したアメリカの雑誌や映画でフロイディズムが流行し、やたらに抑圧された性欲を象徴するモノを取り上げる風潮に対して次のように言う。「フロイディズムとは私の理解するところでは、淫蕩的ウィンの少し気の変な精神科医が考え出した憶説であって、多く不確かな空理に立ち、流行はもっぱら前大戦後の一般的性的退廃の結果たるものであった。」²⁹ とし、フロイディズムの流行がジャーナリズム側の学術的な好みによるものであり、抑圧さ

れた国民の感情を表すと解釈されるものは、実はそのような解釈をするジャーナリズム側の抑圧された感情を露呈するのに過ぎないという。マスコミでもてはやされる思想の流行に安易に迎合することを拒否しようとする態度は『俘虜記』に一貫して見られる態度である。

そのひとつに、おそらくキング牧師のことであろうと思われる部分がある。俘虜収容所で見た唯一真の「社会的不満」は、アメリカ南部の市民権運動の黒人達の写真だと述べたのち、「彼らの間に人気のある宗教的ボスの写真もあった。白人的豪華を装った巨大な黒人で、カメラの狂奔は絵解きの文体の華美と平行して、この道化師のシャルラタンスムの惨めさを遺憾なく表わしていた。」³⁰ という文章が続く。まず「宗教的ボス」という言い方には宗教を背景に権威をふりかざす詐欺師的な含みを感じられ、「白人的豪華」「巨大」などのことばが尊大な様子を裏付け、ついに「道化師」との烙印を押される。真実の社会的不満の中であって、この人物は茶番劇を演じているという解釈である。「カメラの狂奔」「文体の華美」という言い方は、マスコミが自ら作り出した流行に逆に振り回される滑稽さを表現している。「どんな平凡な事実も面白く、深刻な事実も和らげて、要するにオフィスの談話に乗るように語ることが出来る」³¹ アメリカのジャーナリズムの文体と映像に魅了されながらも驕されまいとし、作られた英雄の虚飾を見抜くのである。

このような批評精神は、自分自身に対しても容赦なく向けられる。俘虜収容所では、国際協定によって俘虜は十分な食事を与えられ、労働に対しては給料が支払われていた。大岡の観察では、給与に対して軽すぎる労働であったらしい。まだ日本の兵士達が戦い飢えている最中に、俘虜たちが多すぎる食事を残し残飯がドラム缶一杯になるという矛盾した状況を自覚した上で、「如何に墮落した俘虜の間に交わっていたとはいえ、春本を書いた私を汚らしいやつというかもしれない。しかし私は何も春本を書かなくても汚らしい人間かもしれないのである。」³² と書く大岡には、俘虜として危険のない飽食の生活を送る自分はそれだけで罪ある人間だという認識がある。次の一文はもっと辛らつな意味を持つ。「ただ『チャタレー』の流行が敗戦日本の収容所化を促進するから悪いというのなら、問題はまた別である。」³³ 大岡が、敗戦日本の収容所化を確信していなければ、促進を心配することは出来ないはずである。大岡が収容所で起こった出来事として描いている様々な墮落は、実は、戦後の日本社会の戯画だったのである。もし大岡が戦い続ける同胞に対して自分を「汚らしい人間」と感じたような、厳しい自己批判の視点が我々に完全に欠如しているとすれば、我々は演芸大会に興じ、物々交換に一喜一憂する墮落した俘虜と同じである。大岡の言説は、我々に自己点検と自己批判を要請するような性質を持つのだ。

5 記録の徹底検証

『レイテ戦記』が書かれる前、歴史資料の正確な扱いについて意見を書いてきた大岡が、『レイテ戦記』で試みているのは、日米双方の戦争資料、生き残ったものによる証言、などを厳密に検討して、嘘を暴き真相を探っていくという方法である。「すべて大東亜戦について、旧軍人の書いた戦史および回想は、このように作為を加えられたものであることを忘れてはならない。それは旧軍人の恥を隠し、個人的プライドを傷つけないように配慮された歴史である。さらに戦後二十五年、現代日本の軍国主義への傾斜によって、味付けされている。歴史は単に過去の事実の記述にとどまらず、常に現在の反映なのである。」³⁴ と考える立場から、証拠を鵜呑みにはせず、史料をゆがめないと確信した場合には心理的解釈を容赦なく組み入れながら、戦争史の再解釈をしている。

たとえば、「海戦」の章で、栗田艦隊のレイテ湾突入中止については、「これらの疑わしい証拠の蓄積、長官幕僚の混乱した証言、弁明、言い換えの群れから浮かび上がってくる事実は、栗田艦隊の戦意不足、レイテ湾に突入の意志の欠如ということであろう。」³⁵ という結論に至る。つまり、いろいろな粉飾を取り去ってみると、栗田長官を始めとする乗組員の「恐怖」³⁶ という、心理的事実が浮かび上がってくるのである。軍人による記録の信憑性の低さを暴い

たものの中でも、特に、日本軍の司令部が米軍に急襲された昭和19年12月19日直後に、鈴木中将からなされた土井参謀への転進命令が、実は非公式な内示であったにもかかわらず、これを正当化するために改ざんされた日付についての詳細な検討は、日本軍が危機的状況にありながらその事実を隠蔽しようとした保身的作為を明らかにする。「これはこの後三十五軍の行動を決定した有名な「自活自戦命令」である。「自戦」とは妙な言葉だが、要するに今後補給してやれないが適当にやれということである。この虚構は「第十四方面軍の統帥」によって補強される。それによればこの命令が出たのは十四日になっている。この日は米輸送船団がパナイ島を通り過ぎ、ルソン島に直接上陸する危険が生じた日だが、命令はレイテ決戦放棄を意味する。このような重大な作戦変更は総軍と大本營の許可なく決定することは出来ない。大本營陸軍部が持久思想へ転換を決定したのは十八日、総軍の飯村総参謀長がサイゴンから飛来したのは二十日、大本營の新任第一部長宮崎中将がマニラに着いたのは二十一日である。命令は合議の結果二十五日付で出たのが正しい。」⁹⁷ つまり、転進命令は14日どころか、転進不可避の現場での判断の後に出されたのが事実であり、命令が戦闘に先立たないという末期的状況を、軍の記録が如何に改ざんしていたかが明らかになる。

6 直截な賛辞

「片岡中将は抗議したという。自分はすでにリモン峠で一万の部下を死なせている。師団はすでに戦力を消耗しているから、セブに転進しても、どれだけの働きが出来るか疑問である。部下も皆レイテの土になる決心をしているはずである。レイテに残して欲しい、といった。友近参謀長はこれに対し、「鈴木閣下のお考えは違う。第一師団は決戦師団として送られてきたもので、三十五軍としてはいわば借り物である。借りたものを先に返さねばならぬ。第一師団から先に出発してもらいたい」片岡中将はさらにいった — その点は六十八旅団も同じではないか。旅団は十二月七日上陸したばかりの新鋭である。新作戦地で戦局の啓開のため使用さるべきではないか。この場面はレイテ作戦末期の美談として伝えられている。鈴木中将の指導には作戦的には見るべきものはなかったが、こういう条目を通した義理固さは、一貫して認められるのである。レイテで死にたいという片岡中将のいい分も、よく語られる戦陣美談であるが、この敗軍の中でそれをいうにはやはり覚悟が要る。ひたすら逃げ出した福栄中将の例があるだけに、中将の態度は立派といえる。」⁹⁸ と片岡中将を賞賛する飾り気のない「立派といえる」という言葉は、あらゆる記録、証言を懐疑的に分析するときの饒舌で辛らつな表現に比べ、愚直ともいえる簡潔さにむしろ本心からの賛意がにじみ出てくる。同じ率直な賛辞は、次の文に現れる。「鈴木宗作中将の最期については、このほか山下奉文より送られた短刀を腹に当てていたなど異説が多いが、綿野副官は中将の身辺に始終付き添っていた専属副官であり、浄土宗の僧侶である。この人の言は信用してよいと思う。レイテ島の地上戦闘は誰がやっても勝ち目のない戦いであった。作戦に積極性を欠く難点はあるにしても、俄作りの三十五軍をかかえて、その統帥は立派であったといえる。その死を飾る必要はないのである。」⁹⁹ 『レイテ戦記』は全体として、連絡の不備と作戦の不徹底、戦場からの逃避など愚劣な軍人の姿が数多く描かれる中、片岡中将と鈴木中将に対する「立派」であるという簡潔な高い評価は際立っている。いわゆる戦争美談にだまされまいと証拠を疑うことから戦争の真の姿を求めた大岡は、その過程で明らかになっていく戦争の醜悪さの中で、この2人の職業軍人の中に良心の可能性を見たのではないだろうか。綿密な資料の検討を経た上で、「立派」な軍人がいたという事実の発見には、余計な美辞麗句は無用なのであった。

おわりに

大岡昇平が俘虜生活を終えて帰還した直後の『俘虜記』『野火』の2作品は、特に前者の第1章「捉まるまで」で追求された「なぜ撃たなかったか」という問いかけが、『野火』では「なぜ食べなかったか」という問いかけに取って代わられながら、どちらも人生の最後に倫理を保ち続けられるか、という問題を徹底的に分析しようとしたという

点は共通している。記録と虚構というジャンルの違いを超えて、この2作品における大岡にとって本質的な問題意識とは、人間が完全な個として選択する行為にはそれを導く何か別のものがあるのではないか、ということであった。それを「神」と呼ぶべきかどうかについては、『野火』の狂人はついにそう呼べると確信し、『俘虜記』の書き手大岡は、「現在私の容認し得るところではない」¹⁰との但し書きを入れながらも、神と呼べる可能性をはっきりと示している。『レイテ戦記』でも、極限における人間の選択の倫理性が大きな問題となっている。職業軍人であっても特攻兵士であっても、どのように死ぬかを突きつけられたとき、無限の可能性の中から何を選択したかを、大岡は問題にする。自己保身に傾かない選択を大岡は評価し、その逆の選択は断罪する。

何が正しく、何が間違っているのか、を問い続け、他からの押し付けではない価値観の形成を止めない大岡の批判的精神は、これら戦争作品を単なる過去の記録にとどまらせはしない。通説や美談を疑い、自らの意味づけを常に求める大岡の言説は、平和に安住し、流行に流される我々に自己反省を促す。『レイテ戦記』について、その後も文献読みと取材を通して補遺の意図を持っていた大岡の強靱な精神力¹¹は、飽食と贅沢の追及に精根を使い果たし、今この時も世界で起こっている殺し合いの報道に接しながら無関心を装う、我々の精神の怠惰を鋭く批判しているのである。

注

1. 「文学的青春伝」、『大岡昇平集 12』、岩波書店、1983年、354ページ。
2. 同上、351ページ。
3. 「大きな悲しみ」、『大岡昇平集 12』、岩波書店、1983年、496ページ。
4. 「スタンダール」、『大岡昇平集 17』、岩波書店、1984年、7ページ。
5. 「出征」、『大岡昇平集 2』、岩波書店、1982年、31ページ。
6. 『大岡昇平集 2』に収録された「再会」によれば、復員直後は関西にいたが、昭和21年1月中旬復員後初めて上京し、「古い文学の友達」に会った折、20年来の先輩X先生から「従軍記」の執筆を依頼され、半年後出来上がった原稿を褒めてもらったという逸話を書いてある。原稿が「捉まるまで」の初校だと考えると、昭和21年の夏のことだと考えられる。再会時のX先生の「他人のことなんか、構わねえで、あんたの魂のことを書くんだよ。」「自分の過去を大事にしなきゃ、何もできやしませんよ」という言葉は、その後の大岡文学の方向を決めたように思われる。
7. 執筆日付に関しては、『大岡昇平集 1』、521ページから529ページの「解題」による。
8. この2章は『作品』第1号、1948年8月刊、に発表された「レイテの雨」がのちに分割改題されたものである。
9. 「作者の言葉」、『大岡昇平集 3』、岩波書店、1982年、425ページ～426ページ。
10. 「俘虜記」、『大岡昇平集 1』、岩波書店、1983年、225～226ページ。
11. 同上、7ページ。
12. 同上、8ページ。
13. 「野火」、『大岡昇平集 3』、岩波書店、1982年、315ページ。
14. 同上、316ページ。
15. 同上、239ページ。
16. 同上、273ページ～274ページ。
17. 同上、237ページ。
18. 「俘虜記」、『大岡昇平集 1』、33ページ。

19. 同上、102 ページ。
20. 「人肉食について」(『大岡昇平集 16』、岩波書店、1983 年、211 ページ～238 ページ) と題する文章の中で詳しく検討している。未開人の人肉食には死者をよりよく葬るという葬儀の意味、キリスト教の聖餐にはキリストの肉と血を食べる意味があると述べている。また、1972 年 10 月にアンデス山中に飛行機が墜落して生き残った約半数の人達は、死者をいったん雪中に埋葬してから神の贈り物としてその肉を食べ 16 名が無事救出されたという実話を紹介している。その中に人肉食を拒否して飢え死にを自ら選んだ人間が 3, 4 人いたという事実について、人肉食を拒否した『野火』の主人公のような人間が現実にはいたことに喜びを感じる、と述べている。
21. 「野火」、『大岡昇平集 3』、400 ページ。
22. 同上、364 ページ。
23. 同上、368 ページ。
24. 同上、368 ページ。
25. 同上、295 ページ。
26. 同上、295 ページ。
27. 同上、295～296 ページ。
28. 「かれの文章の口ぐせに「正確に」という副詞がしばしば用いられる。たしかに大岡昇平ほど論理的な文章を持って小説を書いた作家は日本にはいない。」とは福田恒存の指摘である。『福田恒存全集 第一巻』、文芸春秋、昭和 62 年、445 ページ。
29. 「俘虜記」、『大岡昇平集 1』、326 ページ。
30. 同上、328 ページ。
31. 同上、323 ページ。
32. 同上、436 ページ。
33. 同上、437 ページ。
34. 「レイテ戦記」、『大岡昇平集 9』、237 ページ。
35. 同上、237 ページ。
36. 同上、226 ページ。
37. 同上、279～290 ページ。
38. 「レイテ戦記」、『大岡昇平集 10』、405～406 ページ。
39. 同上、486 ページ。
40. 「俘虜記」、『大岡昇平集 1』、106 ページ。
41. 『成城だより (上)』、講談社文芸文庫、2001 年、64 ページ。